ペロニスモの歴史的背景

三谷　弘

ペロン政権が倒れてから十年余りになるが，今なおペロニスタはアルゼンチン国内に隠然たる政治勢力を誇っている。ペロンスモはアルゼンチン現代史の上に極めて重要な意義をもっているといえよう。報告者は主として１９世紀末から１９４３年ペロンの抬頭までの時期の歴史を扱い，ペロニスモの背景を探ろうとした。

まず前史として１８１０年の独立から１８９０年までの時期を概観した。６０年代から８０年代にかけて政治的統一が達成され，連邦制が完成したのであるが，経済と社会の発展は１９世紀後半，すなわち，政治的統一が達成された時期に進められたとみることができる。入移民を主体とする人口の激増，外国資本の導入による鉄道通信の発展，西欧諸国との貿易の拡大など，この時期のアルゼンチンの経済発展は著るしいものがあった。またこのような経済発展に伴って社会的変革が進行し，階級分化が起こった。都市と地方の対立が生れ，移民とクリオリョの混合から中産階級とプロレクリアートが発生した。土地貴族のエリートは資本家となり，富裕なオリガルキアを形成した。

Noventa の政治危機はこのような経済と社会の変革からひき起された。直接には財政政策の失敗からフアレス・セルマンの政府が倒れたのであるが，１８９２年に労働者，農民・中産階級の党として急進市民党が生れたのは，この危機を政治的に表現するものであった。急進党について１８９６年には社会主義労働党（社会党）が結成された。中産階級と労働者階級の抬頭を軸として民主主義運動が発展し，１９１２年普通選挙と公明選挙を規定したサエンス・ペニャの選挙法が成立した。この法律の制定によって急進党時代（１９１６～３０年）の幕が開かれたといえよう。第一次大戦後の経済の繁栄の中で急進党はペルソナリスタとアンティ・ペルソナリスタに分裂し，世界恐慌の波をうけて３０年にはウリブル将軍のクーデターによりイリゴエン（第２期）政権が倒壊し，急進党時代は幕を閉じた。

１９３０年から４３年までの時期は「悪名高き１０年」Decada Infame と呼ばれる。ウリブル将軍の思想は啓蒙的ファシズムと名づけられる。彼は急進党の復活を抑えるために政

党規制令を公布し，アルゼンチン政党法の基礎をきづいた。フスト（３２－３８），オルティス（３８－４０）らの大統領は反個人指導派の急進党員であったが，保守派と妥協し，不正と腐敗を復活させた。Blanksten のいう通り，この時期はペロンを受け入れる準備期であった。こうして４３年６月ローソン将軍のクーデターにより，ペロン登場の花道が開かれたのである。

結論として報告者はペロンスモの背景としてつぎの４つを指摘した。①アルゼンチン社会の二元性と政治的腐敗，②急進党の中間的性格と過渡的役割，③民主主義の不徹底 ― ペルソナリスモの支配と国民大衆の疎外，④国民意識の未成熟。